

戦後日本の記憶研究と歴史学者の記憶意識

—明治百年祭（1968）を例に—

TOPACOGLU HASAN

1. はじめに

1968年10月23日、明治元年（1868）から一世紀経過したことを記念するため、「明治百年記念式典」が行われた。しかし、日本の経済大国化をアピールする目的で開催された「明治百年祭」イベントは、この式典だけを指すわけではない。佐藤栄作内閣の掛け声のもと、一年を通して全国各地で様々な行事が行われたのである。一連の「明治百年祭」記念イベントは、その全体が日本の近代化の成功を言祝ぐ国家的儀礼であった¹。

この「明治百年祭」の重要性は、「過去」に焦点を当てたメディア・イベントであったという点にある。時期的に1968年という年は、日本の近代化の「現在」をテーマに掲げた「東京オリンピック（1964）」と工業的な「未来」を意味していた「大阪万国博覧会（1970）」の中間に位置している。これらいずれのイベントに関しても、当時の左派知識人たちは批判を展開しているが、過去に対する評価を中心にすえて議論が交わされたのは「明治百年祭」だけなのである。

「明治百年祭」をめぐる議論の経緯を整理すれば、以下のようになる。佐藤栄作内閣は明治百年祭を全国規模で祝うために、1966年3月25日に、二年後に開催する「明治百年記念事業」計画を閣議決定した。その後、1966年4月15日の準備会議では、閣議決定により、同日をもって、国務大臣等国の機関から20名、各界団体代表者から25名、学殖経験者から42名、合計87名がイベントの目的、庶務、事業計画などを決定した。しかし、「明治百年祭」の基本理念が決定された1966年11月2日の第三回会議の後、早くも歴史学者、教育者を中心に「明治百年祭」に対する反対運動が始まった。明治百年祭は「歴史をゆがめる」、「過去の歴史を美化するもの」だとする猛烈な反対運動に日本各地からの様々な団体も参加し、イベントの開始が近づく1968年後半からは一層厳しくなっていた。当時の『読売新聞』（1968年10月23日）に掲載された日本政府による趣旨説明には、「明治100年の記念式典 新たな繁栄、力強く誓う²」という見出しがつけられており、近代化の成功モデルとしての明治百年イメージが強く打ち出されていた。そこでは日本人が過去100年間で政治、経済、文化その他すべての面にわたってどのように奮闘努力を重ね、近代国家建設に向かってどのような歩みを遂げたか、にスポットが当てられていた。しかし、近代化が帝国主義戦争や植民地支配などの暗黒面をもつことも事実である。そのため、進歩的知識人は「明治百年祭」反対運動を国定史観に対する市民的記憶

の対抗運動と位置づけるにいたったのである。

一見、反対派の主張はナショナリズム問題や天皇制イデオロギーに言及した当時の左派的言説の典型ともいえる議論が多いように見える³。歴史学者も佐藤栄作内閣が百年祭を通じて明治期を肯定的に見る傾向を批判し、明治期において日本が経験してきた各戦争、軍国主義、人権問題、などに注目していた。しかし、「明治百年祭」をめぐる歴史家たちの議論にはそれ以上のものが含まれていた。

それは、明治維新、または明治時代にまつわる「記憶」の問題である。記憶研究が学術的な分野として認められたのはここ数十年のことであり、イベントが行われた当時（1968年）の段階ではまだ学術的手法、ジャンルとして意識されていなかった。しかし、このイベントをめぐる議論の中で、歴史学者たちはすでに社会的、歴史的記憶について議論する端緒に立っていたのである。

そこで、本研究ではこの「明治百年祭」をめぐる巻き起こった種々の議論を日本の記憶研究の萌芽として位置づけ、記憶研究の枠内におけるその意義と特異性を明らかにする。

従って、本研究では戦後日本の記憶研究とそれに対する日本の歴史学者の記憶意識が60年代からあったことを明治百年祭イベントを通じて明らかにする。そのために、先行研究としての記憶研究について紹介した上で、記憶研究とメディア・イベントの関係について説明する必要がある。第二章において、記憶研究とメディア・イベントの関係と明治百年祭を記憶研究の視点から考えることの必然性について説明する。そして、日本における記憶研究は第二次世界大戦と占領期における記憶の研究蓄積が圧倒的に多いが、その背景と現状、または特徴についても述べる。続いて、第三章では明治百年祭における学術論文を分析し、当時の議論は単純にナショナリズム問題におけるものだけではなく、社会的・歴史的記憶における議論もあったことを明らかにする。ここで言う「記憶」という言葉は、明治百年祭イベントに対してはっきり発言されていたわけではないが、それを意味する文脈で様々な発言が確認できる。最後の考察の部分において、最初に西洋で話題になったと言われる「記憶」における意識は西洋と同じ頃から日本でもあったことを明治百年祭イベントを通じて確認する。

2. メディア・イベントと記憶研究

2.1. 明治百年祭と記憶研究の関係性

そもそもメディア・イベントである明治百年祭と記憶研究はどのような関係性を持つのだろうか。また、メディア・イベントを記憶研究の視点から見ることで何が得られるのだろうか。本節ではこの点を明らかにするため、まずは記憶研究にある程度通底する学問的ねらいを概観し、それとメディア・イベントとの親和性について明らかにしておきたい。

記憶は、保持期間の長さから短期記憶と長期記憶、記憶の種類からエピソード記憶と手続き記憶といったさまざまな分野がある⁴が、一般的には自伝的記憶と集合的記憶の視点から記憶を分析するものが多い。

自伝的記憶は、具体的な体験に関するエピソード記憶も含めて、過去の自己に関わる情報を示している⁵。自伝的記憶には3つの特徴があり、第一に、新しい記憶、特に最近10年間の記

憶ほどよく想起されること、第二に、0～5歳までの幼児期の記憶の想起量が少ないこと、第三に10～30歳の出来事の記憶が多いことである⁶。

それに対して、集団や社会全体に共有されている記憶のことを集合的記憶という。これは、現在の視点から過去を再構成するという「想起」に重点をおいている概念であり、3つのタイプがある。第一に、家族、学校、友人、職業集団、宗教集団などが、伝承し、保持し、想起する記憶であり、「集団的記憶」とも言い換えることができる⁷。第二に、特定の集団が共有する記憶というより、集団を越えて社会全体に普及し、拡散している「社会的記憶」である⁸。これは、新聞雑誌、ポスター、小説、教科書などによって表現されており、担い手はジャーナリズムと言える。第三に、集合的に国民的出来事に関して形成されている「歴史的記憶」であり、国家的・官僚制的組織、学問・科学制度、集団・階級・国家・民族・イデオロギーから超越した、普遍的な立場を提示する「歴史的枠」を基礎としている⁹。従って、「明治百年祭」は集合的記憶の一種として「社会的記憶」と「歴史的記憶」と両方に関わりが深いと言えよう。

学際的研究分野である記憶研究は¹⁰、アルバックス（1980=1999）¹¹の著作が登場してから議論され始め、特にNora（1984=2002）¹²やコナトン（1989=2011）¹³など出版の後、脚光を浴びるようになり、いまでは歴史研究の新たな分野として認められている。特に国民国家批判が盛んになった冷戦崩壊後の90年代からは、記憶研究ブームとっていいほど研究が蓄積され、現在（2016）でも盛んに議論され続けている。

そうした研究蓄積の中で、アルバックスの集合的記憶の概念は特に重要だ。アルバックスは集合的記憶がマスメディアの情報・体験者からの伝聞・記念式典・資料館・歴史的建造物・写真や映像・歴史教育などによって再構成され続けていることを主張しており、過去は現在の観点から絶えず再構成され続けるというテーゼの典型として受容されてきた。

アルバックスと並んで記憶研究者として著名なノラは自身の分析視角を以下のように説明している。

想起されたり、記念された行動それ自体より、これらの行動が残した足跡や顕彰活動の相互作用により関心がある。事件それ自体よりも、時を経て事件のイメージがどう作られていくか、その意味が消滅したり、蘇ったりすることの方に注目する。実際に起こったことよりも、出来事がたえず再利用されたり、誤用されたりして、現在に引き継がれるその影響に着目する¹⁴。

それゆえ、フランス革命それ自体よりも、その一〇〇周年祭や二〇〇周年祭に注目すべきだと言うのである。

さらに、集団の記憶がいかに伝達され、維持されるのかを論じた社会人類学者コナトン（2011）の視点も記憶のメディア史に役立つだろう。コナトンは社会の記憶を理解するために式典を分析することの必然性について次のように述べている。

私はとりわけ記念式典と身体の実践にこだわってきた。なぜなら、この二つについての研究こそが、私の信じるところでは、過去のイメージと過去について回想された知識のイメ

ージがパフォーマンスによって伝達され、維持されるとわれわれに教えてくれるからである¹⁵。

つまり、再構成される「歴史＝記憶」を理解するために何よりもまず記念式典を分析することに意味があるわけだ。明治百年祭を本稿の研究対象にする理由は、それがコナトンのいうパフォーマンスだからである。それは各種の事業や行事によって成り立ち、それをある集団内外の人々に「見せる」ことが前提とされる活動である。そのため、そこにはある集団の自己像が投影されるはずである。「明治百年祭」に引きつけて言えば、その内容を分析することで、日本で再構成されようとした記憶の創出過程が見て取れるのである。

さらに、これは日本の第二次世界大戦前の研究でもあるが、日本社会の集合的記憶に関する重要な先行研究であるケネス・ルオフ『紀元二千六百年—消費と観光のナショナリズム』（2012）は、人々に忘れがたい機会を与えた国家的式典についてこう書いている。

記憶が個人の自覚をかたどるように、国民の記憶は国民の自覚をかたちづける。国が祝典を催すのは、国家共同体の一体感を維持するのに欠かせない集合的な記憶を強化するためだといってもよい。祝典を分析すれば、その国がどういう国なのかを知ることができるのは、そのためである¹⁶。

つまり、これら一連の「記憶とイベント」研究の視座に立ち、明治維新そのものよりも「明治百年祭」イベントに焦点を当てることで、当時の日本社会で試みられた記憶のポリティクスが考察できるのである。記憶研究とメディア・イベント—とくにここでは明治百年祭—はこのような密接な関係にあるといえよう。

2.2 戦後日本の記憶研究

私たちは今、記憶の時代を生きている。そして、それは同時に、記憶の場が遺産として登録され、その記録や保存が大切なテーマへと成り上がった時代でもある¹⁷。そこでは、記憶や遺産といった、過去自制に属しているはずのものが、逆に現在から未来へとつらなる時制においてこそ語られる。では、日本の場合戦後からここまで何が語られてきたのだろうか。本節では「歴史」と「記憶」との関係を明らかにしたうえで、日本における記憶研究の特質を論じてみたい。

ジャック・ル・ゴフ（1999）『歴史と記憶』の議論によれば、近年のナイーヴな傾向として、「歴史」と「記憶」をほとんど同一のものと見なし、さらには歴史よりも記憶をある意味で重視する風潮が見られるという¹⁸。つまり、記憶は歴史よりはるかに「真正」なものであり、他方、歴史は人為的なものであって、記憶の操作から成るものだというのである¹⁹。確かに、歴史というものは、歴史学者が生きている社会的構造に依存する過去の整理である。そして歴史学は、歴史叙述の多様性を認識しつつ、客観性を追求し、歴史的「真実」についての確信の上に立ち続けるのである。それに対して記憶は、それは書かれたものであれ、口承のものであれ、歴史学者にとって歴史の原材料である。歴史学は、記憶を豊かにし、個人や社会が生きている記憶

と忘却の弁証法的なプロセスに戻っていく。こうした記憶や忘却を理解し、それを知の対象にすることこそ、歴史学者の役割である。つまり、歴史とは記憶を再構成する作業にほかならないのだ。

日本におけるそうした記憶研究の最も目立った特質はその対象である。日本における記憶研究が対象とするテーマは明らかに「戦争」に偏っているのである。日本の記憶研究を概観すれば、何よりもまず「戦後」という言葉が目につく。高榮蘭（2010）『「戦後」というイデオロギー——歴史/記憶/文化』は、「戦後」という言葉の空白性が充填される瞬間＝歴史的記憶に亀裂が垣間見られる瞬間に注目し、記憶の再編が如何に行われているのかについて分析している。その中で、高は次のように述べる。

一九四五年八月一五日を起点として作られた「戦後」。その「戦後」というバイアスを通して編成される記憶は、アメリカとの戦争、しかも日本の「終戦」物語に符合するものに限られる²⁰。

日本が植民地を広げていた時期、戦争に勝利をしていた時期まで「戦後」の想像力が及ばないことが日本の記憶研究における一つの特徴であるというのだ。また、『記憶の場』の監訳者である谷川稔によれば「日本での『記憶』概念の理解は、一九九〇年代における『戦争の記憶』論と『国民国家（反対）論』の隆盛を抜きには語れない」²¹。つまり、日本ではとりわけ、記憶という問題系が「戦争の記憶」を焦点として展開されてきたとも言えるのである。

成田龍一によれば、記憶とは、しばしば体験／証言／記憶の三位一体の様相を示すとともに、時系列的であり、時期によって三者の関係が変化する、という²²。そして、この体験／証言／記憶の集合体は、「戦後」という時間の射程の中で次のように推移したとされる。「当初は、戦争経験のある人びとが同様の経験を有する人々に語りかけ」²³、「体験」が代表する時代となつていく。そして、やがて「戦争経験を有する人びとがそれをもたない人びとと交代の兆しを見せ」²⁴、一九七〇年前後には「証言」の時代に突入する。そして、「戦争の直接の経験をもたない人びとが多数を占めるようになった一九九〇年には『記憶』が証言・体験に優越し『記憶』が主導する時代となつた」²⁵という。つまり、「一九五〇年代を中心とする「体験」の時代、一九七〇年代を中心とする「証言」の時代を経て、一九九〇年代から「記憶」の時代が開始されてきた」²⁶と、成田は考えているのである。

また、ハルトゥーニアン・ハリー（2010）『歴史と記憶の抗争——「戦後日本」の現在』も戦後日本の記憶研究について纏めている。ハルトゥーニアンはまず、日本では一九九〇年代初頭以来とくに、米国とアメリカに対する戦争の終結五〇周年記念を通じて、書籍、論文などが数多く出版され続けてきたことにスポットを当てている。それらの出版物のテーマは「敗戦から現在までの半世紀における戦争という重大な出来事の帰結を意味づけようとするもの」²⁷だったという。ハリーは他国の場合と同様、日本人も記憶そのものや「体験」の回復に訴えかけてきたことを主張した上で、日本のそれは「アジア各国における大量虐殺、破壊、そして敗戦を招いたこのできごとの意味を理解しようとするよりは、戦争を遂行した自国の死者と、戦後を生きてきた日本国民の関係を再構成することをその目的としている」²⁸と述べている。

ここまでの話をまとめると、一九九〇年代に入ってから、歴史を論じ、考察するに当たって記憶ということが言われるようになり、記憶を方法とする議論が盛んに行われてきている。そして、日本において、特に戦争の歴史を扱う概念として、記憶の概念が大きな影響力を持ち、「戦争と記憶」は格好のテーマとして取り上げられている²⁹。つまり、ノラの言う「現在の中にある過去」³⁰は、戦後日本の場合「戦争」を意味するのであり、日本の記憶研究は戦争をテーマに掲げるものが圧倒的に多いと言える³¹。

しかし、このことが、日本の記憶研究の幅を著しく狭め、歴史研究との境界を曖昧にしているといえる。なぜなら、戦争の記憶研究には記憶が生まれる瞬間に対する問題意識が希薄だからである。戦争をテーマに掲げる記憶研究は、すでに存在する記憶そのものを、あるいは、時間がたつに連れてその記憶がどういう風に再構成されたかを分析する。こうした傾向は日本だけに見られるものではない。ドイツやフランスなどの過去の戦争に関する記憶研究においても同様の特徴が見られる。「戦争」をテーマにしている記憶研究の特徴であろう。しかし、本稿で扱う明治百年祭のような、メディア・イベントを記憶研究の視点から分析する場合、いかにしてその記憶が生まれたか、また、イベントを開催する側がどのような記憶を生み出そうと意図したのか、といった問いも重要になってくる。すでにある記憶や再構成された記憶というよりは、記憶が作られるその瞬間が分析の対象になるのである。日本では、メディア・イベントを記憶研究の視点から分析するもの、従って「記憶が作られる瞬間」に注目する研究が非常に少ないことがその特徴として浮かび上がってくるのである。

ただし、「記憶が作られる瞬間」に注目しており、かつ戦争を対象としている先行研究もごくわずかなが存在していることには留意しておきたい。記憶研究のメディア史について語っている佐藤卓己(2005)『八月十五日の神話—終戦記念日のメディア学』が挙げられる。記憶と忘却に関心を寄せ、特に戦前と戦後の「断絶」と「連続」に着目している佐藤は、日本の終戦記念日(8月15日)において、玉音放送をメディア論から、つまりその内容ではなく、その形式と受け手に焦点を当てて分析している。佐藤は、「玉音」というメディアの象徴的機能を読み取るに際して、「内容=詔書の意味」の理解よりも「形式=天皇の肉声」の方が重要だとし³²、結果として日本の終戦記念日は、集合的聴取体験から戦後「国民的記憶」として創られたものであると主張している。佐藤は日本国民の「歴史=記憶」が構築される戦後史を描くにあたっても、玉音放送、東京オリンピック、大阪万国博覧会などの国民的出来事がドキュメンタリー映画やテレビ・ニュース、あるいはその時代を扱ったドラマや小説が繰り返して流されていることの重要性を指摘している。そうしたメディアによって整理され、再編された「記憶=歴史」の上で、個人は自分の体験を国民的記憶に位置付ける。こうして、「個人の記憶は記録集や記念塔、小説やドラマによって意味づけられ、ジャーナリスト自身の記憶も巻き込みながら、引用や孫引きが繰り返され、やがて国民の『歴史=記憶』が構築される」³³のである、と。

以上のように、わずかな例外を除けば、日本の記憶研究は戦争に関する記憶、それも想起された記憶に大きく偏った形で進められてきたといえる。次章ではこれらの全体像を整理しつつ、明治百年祭に関する議論の特異性を明らかにしてみたい。

3. 明治百年祭と歴史学者の記憶意識

前述したように、日本における記憶研究は1990年代から始まり、それも戦争における記憶研究はメインで進められてきた。このことを念頭においた上で、明治百年祭の議論がどのような角度からなされてきたかを明らかにして見たい。

まずは、吉村徳蔵（1968）「歴史教育と『明治百年』（「明治百年祭」に反対する歴史研究者・教育者の集会の記録(特集)）」から考えてみたい。吉村は明治百年祭の様々な問題点について述べ、その一つとして「明治」という時代をどうとらえるかについて疑問を述べている³⁴。生徒に明治についてのイメージというものを聞いた吉村は「私は高校ですから、大体、小学校、中学校で得たイメージがそのまま残っている」³⁵と述べ、しかし、その中には「倒幕をしたが、実際には、天皇中心の国家になる。本当に人民の間から起こった革命ではなかった。ほんとうに日本の国民主権の国家にはなりえなかった」³⁶というイメージが存在していたことを主張している。また、「徳川による封建性が内部と外部の圧力によってつぶれて、支配者が将軍から天皇制に移り、日本の軍隊が強化され、天皇主義への道を歩み始めた³⁷」というような評価をしている生徒がいたことにも言及している。これは明らかに日本資本主義論争における「講座派」の立場であり、生徒の意見という形をとりつつ、吉村自身の見解を表明した発言であると捉えることができる。

一方、佐藤栄作内閣が意図していた明治百年祭イベントのメッセージというものは、明治時代を肯定的に捉えるものであり、吉村の言う「イメージ」と相対立するものだった。新たな記憶が生成されようとする瞬間におけるイデオロギー対立がここに見て取れる。当時（1968年）の歴史学者は明らかに記憶の問題を意識していたのである。

佐藤栄作内閣によって生成されようとする記憶に対抗する戦略として、記憶の位相をずらしようとする議論も当時は存在した。明治維新や明治時代ではなく、戦争に焦点をあてようとする主張である。「明治百年」と言うとき、そこには当然敗戦の記憶も含まれてくるからだ。たとえば、井上清（1968）「世直し100年いまだ成らず（明治100年のパラドックス(特集)）」がこれにあたる。明治百年祭イベントを1940年に行われた「紀元二千六百年」祝典の現代版として考えている井上は、「ここに一九四〇年と一九六八年の日本国民のちがいが表現されている」³⁸と述べた上で、こう主張する。

明治元年からここに百年、わが国が近代国家としてめざましい発展をとげ、本日の記念式典を迎えたことは、まことに喜びにたえません」といわれても、〈戦争の経験をへた国民：執筆追加〉はどれだけ共感できるのだろうか³⁹。

第二章で論じた成田龍一による体験／証言／記憶のプロセスに沿って考えれば、これは記憶を体験や証言の次元へと捉えなおすことによって、記憶の生成を阻止しようとする動きであったと言えよう。

社会的弱者という視点から「明治百年祭」で生成されようとする記憶を批判しようとする議論にも言及しておきたい。高橋〈シン〉一（1968）「日本人民にとって「明治百年」とはなにか

(「明治百年」論批判(特集))」は明治時代における異なる記憶を別の角度から分析しており、その一つは女性の異なる記憶である。高橋は「女性にとって明治百年はおめでたいか」⁴⁰という問いかけから議論を始め、選挙権を日本国民並みに手に入れたのは遅いこと、そして、日本だけではなく、「多くの場合女性の選挙権が遅れるが、日本の女性は非常にそれが遅れた」⁴¹ことを主張し、明治時代における男女の異なる記憶について明らかにしている。

また、高橋は日本社会のマイノリティーにおける記憶問題にも注目している。彼は「三百万と大づかみにいわれる部落民にとって、『明治百年』はおめでたいか」⁴²という問題意識のもと、明治時代における部落民の記憶を分析している。高橋は、部落民が生きてきた環境について「歴史的、体験的に水の底になってしまうところにしか住むほかないため、水は部落を狙って氾濫をしていく結果になる」⁴³と述べ、就職条件に環境の悪い、水害のおこる地域からは採用しないという会社があることを例として挙げることで、差別問題に言及している。高橋は、「大水が出たときに見舞金を出すには経理上都合があるから、と口ではいうのかもしれませんが。しかし、この就職条件、明らかに客観的に部落差別である」⁴⁴とし、「部落民にとって明治百年は差別百年であった」⁴⁵と主張している。現代においてもなお、戦争における記憶研究がメインで進められている日本において、明治時代における部落民というマイノリティーが持つ記憶にスポットを当てている高橋の議論は、支配的記憶が生成されようとする瞬間だからこそ生まれてきたともいえる。

さらに、高橋は明治時代に対する各地域の異なる記憶についても分析し、沖縄の例を挙げている。「沖縄県民にとって『明治百年』はどうなのか？」⁴⁶という質問を出発点として、「あらためて申すまでもなく沖縄の人々は人類、言語、風俗すべて完全に日本人である」⁴⁷にもかかわらず、江戸時代から沖縄の人々がずっと差別されてきたという。明治時代になっても廃藩置県がおくれ、大日本帝国憲法が公布された後も日本国民としての権利がなかなか認められなかったことを主張する。加えて、太平洋戦争、沖縄戦では、非戦闘員が戦闘員よりも多く犠牲になったという事例なども説明し、沖縄の人が差別されてきたことを主張している。つまり、明治時代における沖縄人の記憶と日本本土の人々の記憶が異なることを明らかにしているのである。

「明治百年祭」を通じて、地域の異なる記憶について論じたのは高橋だけではない。原田久美子(1968)「『明治百年祭』と地方自治体—京都府百年記念事業をめぐる—」は京都で行われたイベントの特徴について述べている。原田は、政府の意図について述べた上で、京都の場合、明治百年祭が持つ意味が政府のそれと異なることを明らかにしている⁴⁸。

以上のように、「明治百年祭」をめぐる議論は、様々な論者の思惑が交錯するフィールドとなっていた。生成されつつある記憶、そして戦争という大きなトピックに回収されない記憶だからこそ、当時のイデオロギー的布置やマイノリティーやジェンダー、地域性、といったもののへの捉え方などが表れてくる領域であると言える。

4. おわりに

本研究では記憶研究とメディア・イベント、中でも戦後日本で最大のメディア・イベントの一つである明治百年祭と記憶研究の関係性及び、それを記憶研究の視点から分析することの意

義について論じてきた。アルバックス、コナトン、またはノラの議論からも明らかなように、ある事件や出来事のインパクトを理解するためには、その事件や出来事自体よりも、それがいかに祝われているのかを見る方が有効である。記念式典や記念塔などといったような、人々の祝い方にはその歴史的な事件や出来事に対する人々の記憶が色濃く刻まれており、それを分析することで社会的記憶や歴史的記憶、そしてそれがもたらす社会的影響や意義が理解できるのである。その意味で、日本社会が持つ明治維新及び明治時代のイメージを取り出す方法とは、明治維新や明治時代を研究することではなく、明治百年祭を分析することなのである。

また、明治百年祭をめぐる当時の論争においては、社会集団や、地域集団ごとに異なる記憶が存在することも指摘されている。しかし、そこに焦点を当てるためには、日本における記憶研究の圧倒的多数を占める戦争の記憶から距離をおく必要がある。そうした研究視点を提供してくれるという意味でも、明治百年祭という対象は記憶研究の新しい展開にとって重要な意義を持っているといえよう。

しかし、日本にも戦争以外の記憶が多数存在しており、それを取り出す研究蓄積がまだまだ少ないと言える。金原左門が指摘しているように、「わたしたちは『明治百年』論をつうじて政府への批判をくりかえすにとどまるのではなく、論争をつうじて日本近代の全体像をどう再構成すべきかという課題に積極的に迫っていかなければならない」⁴⁹。金原が言う「再構成」とは、記憶の再構成であり、明治百年祭に対する記憶を分析することで日本近代の全体像における理解が深まることを意味する。そのため、第三章で説明したように、明治維新や明治時代に対して日本全体の記憶が同様なものではなく、地域によって記憶が異なるところがある。そして、ジェンダーから見てもマイノリティーの部落民から見てもその記憶がまた異なるのである。さらに、当時（1968年）の歴史学者にはその意識が十分にあり、「記憶」という言葉を直接発言しなくても、それを意味する文脈で社会の異なる記憶に主張していたのである。

日本ではまだ「東京オリンピック」（1964年）や「大阪万国博覧会」（1970年）、あるいは「明治百年祭」（1968年）のような戦後日本の大きなメディア・イベントを記憶研究の視点から分析し、そこで再構成された記憶を明らかにしている研究がほとんどない。しかし、日本近代の全体像を再構成するために、このような研究の役割を考えてみる必要はあるだろう。そして、ポスト近代的な現状においてこそ、日本の近代化をめぐる記憶のメディア学が必要なのである。

注

- ¹ 佐藤卓己『現代メディア史』岩波書店、2010年、223頁。
- ² 『読売新聞』（1968年10月23日）「明治100年の記念式典 新たな繁栄、力強く誓う」、夕刊、1頁。
- ³ 例えば、市井三郎[他]「明治百年とナショナリズムの方向」、『潮』（74）、162-179、1966-08や色川大吉「天皇制イデオロギーと民衆意識（天皇制イデオロギー『明治百年』批判（特集））」、『歴史学研究』（341）、2-20、1968-10や佐藤伸雄『『明治百年祭』への歴史研究者のたたかい』、『文化評論』（77）、144-147、1968-02はナショナリズム問題や軍国主義、天皇制イデオロギーなどについて述べており、このような研究蓄積が多数確認できる。
- ⁴ 萩原滋『テレビという記憶：テレビ視聴の社会史』新曜社、2013、22頁。
- ⁵ 佐藤治一（2008）「自伝的記憶研究の方法と収束の妥当性」佐藤治一・下島裕美・越智啓太『自伝的記憶の心理学』北大路書房、2008、2-18頁。
- ⁶ 榎洋一・仲真紀子（2006）「高齢者の自伝的記憶におけるバンプと記憶内容」『心理学研究』77、333-341頁。
- ⁷ 萩原滋、前掲書、23頁。
- ⁸ 同上。
- ⁹ 同上。
- ¹⁰ Jeffrey K. Olick “Collective memory: A memoir and prospect” Memory Studies, 2008, 27頁。
- ¹¹ 日本語版は小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年。
- ¹² 日本語版は谷川稔監訳、岩波書店、2002年-2003年。
- ¹³ 日本語版は芦刈美紀子訳、新曜社、2011年。
- ¹⁴ ピエール・ノラ（2002）『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史』岩波書店、第一巻、27-28頁。
- ¹⁵ ポール・コナトン『社会はいかに記憶するか—個人と社会の関係』新曜社、2011年、69頁。
- ¹⁶ ケネス・ルオフ『紀元二千六百年—消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版、2012年、14頁。
- ¹⁷ 赤坂憲雄 編『歴史と記憶 場所・身体・時間』藤原書店、2008年、141頁。
- ¹⁸ ジャック・ル・ゴフ(著)、立川孝一(翻訳)『歴史と記憶』法政大学出版局、1999年、2頁。
- ¹⁹ 同上。
- ²⁰ 高榮蘭『「戦後」というイデオロギー—歴史/記憶/文化』藤原書店、2010年、10頁。
- ²¹ 谷川稔(監訳)、ピエール・ノラ(編集)『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史』岩波書店、2003年、7頁。
- ²² 赤坂憲雄、前掲書、143頁。
- ²³ 富山一郎 編『記憶が語りはじめる』東京大学出版会、2006年、4頁。
- ²⁴ 同上。
- ²⁵ 同上。
- ²⁶ 同上。
- ²⁷ ハリー・ハルトゥーニアン(著)、カツヒコ・マリアノ・エンドウ(翻訳)『歴史と記憶の抗争—「戦後日本」の現在』みすず書房、2010年、123頁。
- ²⁸ 同上。
- ²⁹ 富山一郎 編、前掲書、3頁。
- ³⁰ ピエール・ノラ、前掲書、5頁。
- ³¹ 例えば、次のような研究蓄積が多数確認できる。
- ³² 佐藤卓己（2005）『八月十五日の神話—終戦記念日のメディア学』ちくま新書、148頁。
- ³³ 同上、27頁。

- ³⁴ 吉村徳蔵「歴史教育と『明治百年』（「明治百年祭」に反対する歴史研究者・教育者の集会〔昭和43年10月19日〕の記録(特集))」『歴史評論』（220）、1968-12、26頁。
- ³⁵ 同上。
- ³⁶ 同上。
- ³⁷ 同上。
- ³⁸ 井上清「世直し100年いまだ成らず（明治100年のパラドックス(特集))」『朝日ジャーナル』10(46)、1968-11-10、10頁。
- ³⁹ 同上。
- ⁴⁰ 高橋〔シン〕一「日本人民にとって「明治百年」とはなにか（「明治百年」論批判(特集))」『歴史評論』（213）、1968-05、29頁。
- ⁴¹ 同上。
- ⁴² 同上、30頁。
- ⁴³ 同上。
- ⁴⁴ 同上。
- ⁴⁵ 同上。
- ⁴⁶ 同上、31頁。
- ⁴⁷ 同上。
- ⁴⁸ 原田久美子『「明治百年祭」と地方自治体—京都府百年記念事業をめぐって』『Journal of Japanese history』（98）、1968-05、66頁。
- ⁴⁹ 金原左門『「近代化」論の転回と歴史叙述—政治変動下のひとつの史学史』中央大学出版部、2000年、143頁。

（生涯教育学講座 博士後期課程3回生）

（受稿2016年9月9日、受理2016年11月4日）

戦後日本の記憶研究と歴史学者の記憶意識

—明治百年祭（1968）を例に—

トパチョール・ハサン

本研究では、戦後日本の記憶研究とそれに対する日本の歴史学者の記憶意識について明らかにした。具体的には、まず記憶研究の先行研究を紹介し、それと本研究で扱う明治百年祭というメディア・イベントの関係を述べた。日本における記憶研究は「戦争・占領」の記憶に関するものに集中しており、他の集合的記憶についての分析が手薄である。続いて、明治百年祭を分析することで、日本社会には戦争以外の記憶も存在していることが確認し、しかもそれは国全体に同様なものではなく、地域やマイノリティーなどによって異なることが明らかにした。さらに、現在の記憶研究が戦争を中心に行われているにもかかわらず、当時の歴史学者には、社会の異なる記憶の意識があったことが明治百年祭に対する歴史学者の反応から確認できたのである。

Memory Studies in Postwar Japan and Japanese Historians: the Meiji Centennial Event (1968)

TOPACOGLU HASAN

This study was performed to analyze the characteristics of memory studies in postwar Japan and discuss the awareness of this issue among Japanese Historians. We first introduce early studies about memory and then discuss the relationship between memory studies and media events in Japan, using the Meiji Centennial event as an example. We argue that memory studies in postwar Japan have been mostly about World War II and the bad experiences Japan faced after losing the war. However, this study suggests that Japan has more to offer to the field of memory studies than simply bad memories of a war, but this has not yet been studied in sufficient depth. We also stress that the memory of a specific event, in this case the Meiji Centennial, can show different characteristics depending on social class, gender, region, etc. Moreover, we suggest that Japanese Historians were already conscious about such memory differences in the 1960s and they pointed it out through the Meiji Centennial event, not quite explicitly but implicitly. Finally, we suggest that it is possible to explore Postwar Japan's various memories by examining its large-scale national events.

キーワード： 明治百年祭、記憶研究、戦後日本

Keywords: Meiji Centennial, Memory Studies, Postwar Japan